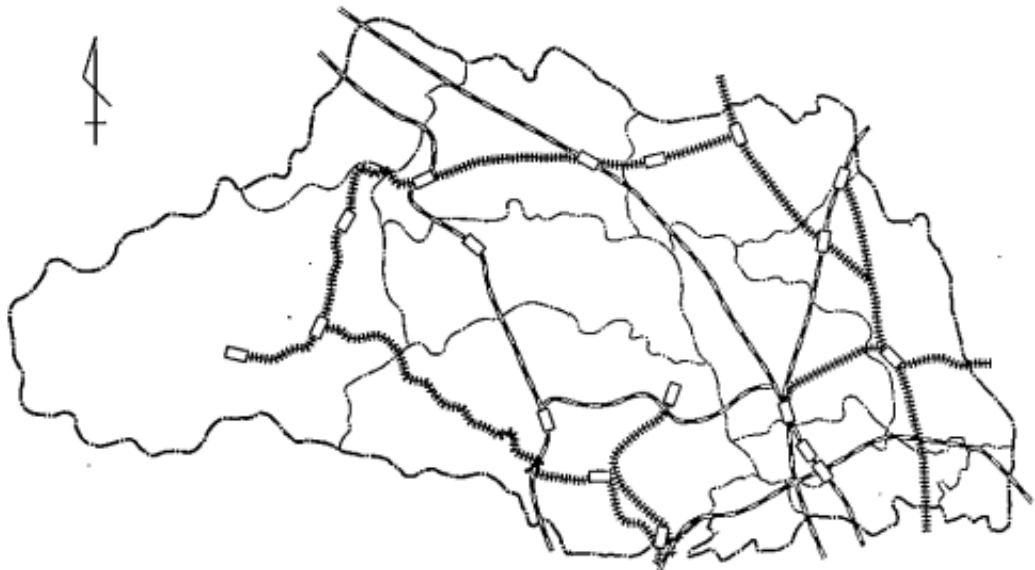


令和 8 年度

埼玉県英語教員研究発表会

期 日 令和 8 年 8 月 6 日 (木)

場 所 八潮市民文化会館 (メセナ)



主 催 埼玉県英語教育研究会

後 援 埼玉県教育委員会

さいたま市教育委員会

八潮市教育委員会

目 次

・ 目 次	P. 1
I 開催要項	P. 2
II 会次第	P. 3
III 全体研修会記録	P. 4
講演 「『主体的・対話的で深い学び』を目指した言語活動の充実」	
講師 名古屋国際大学外国語学部 英米語学科 教授 太田 光春 先生	
IV 分科会記録	
第1分科会	
(1) 「選択」と「共有」を取り入れた授業実践について	P. 6
(2) 5ラウンドシステムによる授業実践の成果と報告	P. 8
第2分科会	
(1) 話す活動につなげる音声・音読活動	P. 11
(2) 児童が話せるようになるための実践	P. 13
～児童に無理なく4技能を育む「7つの言語経験順」を通して～	
(3) 3年間のゴールを見据えた授業デザインと評価	P. 15
～話すこと・書くこと・リテリング～	
第3分科会	
(1) 主体的に問いを追究し、解決しようとする児童の育成	P. 18
(2) 自己発信できる生徒の育成を目指して	P. 20
～基礎基本の育成と単文から発信練習～	
(3) AI 学習プラットフォーム「World Classroom」を活用した英語による発信力の育成	P. 22
—教育 DX の視点を生かした個別最適な学びと対話活動の充実を通して—	
第4分科会	
(1) ICT と AI を使った授業改善	P. 25
(2) 言語活動を主軸とした表現活動の実践	P. 27

令和8年度 埼玉県英語教員研究発表会の開催について

- 1 趣 旨 教材の捉え方、指導計画、授業展開、評価等英語教育に関し研究協議等を行うことにより、県下英語科および外国語活動担当教員の指導力の向上に資する。
- 2 主 題 「21世紀を逞しく生き抜く人材の育成を目指した英語教育
～自分のことばで自分の考えを他者に伝えることのできる児童・生徒の育成～」
年々、社会は急速に変化している。新型コロナウイルス感染症の蔓延以後、世界でもグローバル化だけでなくAIの到来やGIGAスクール構想による、一人一台端末の配付など学校の存在価値や意義が見直されることが多くなった。こうした社会において、知識をどう蓄えるかではなく、「既習の知識を他者に合わせてどう使うか」や「自分の意見をどのように他者へと伝達するか」が求められている。子供たちが豊かに逞しく生きるために、主体的かつ協働的に課題解決できる力が求められている。令和10年度からは小学校から段階的に学習指導要領が実施される。引き続き小学校・中学校とも上級学校との連携を一層進めるとともに、上級学校での英語学習の土台作りを行い、学年が上がるごとに英語の学習意欲が向上するよう、英語によるコミュニケーションを行う目的や状況、場面を意識させながらも必要性和楽しさを体得させる指導を計画的に進めることが求められている。
本県研究会においては、学習指導要領における外国語科の目標に照らし、これまでの実践をもとに、児童・生徒一人ひとりが主体的にコミュニケーションを大切にする英語教育を進め、21世紀を逞しく生き抜く人材の育成を目指すために本研究主題を設定した。
- 3 期 日 令和8年8月6日（木）
- 4 会 場 八潮市民文化会館（八潮メセナ）（〒340-0816 八潮市中央 1-10-1 TEL: 048-998-2500）
- 5 主 催 埼玉県英語教育研究会
- 6 後 援 埼玉県教育委員会 後援承認番号 教 義 指第 360 号（5月21日付け）
さいたま市教育委員会 後援承認番号 教学教指第 2448 号（7月 2日付け）
八潮市教育委員会 後援承認番号 八潮教小第 260 号（6月30日付け）
- 7 指導者 熊谷市教育委員会 教育研究所指導主事 長谷川哲矢
北本市立南小学校 教 頭 玉神 順哉
東部教育事務所 学力向上推進担当指導主事 松岡 秀実
所沢市立教育センター 指 導 主 事 清水 航
- 8 日 程

9:10	9:30	10:00	11:40	12:45	13:00	16:20	16:30
役員 打合せ	受付待機 時間	開会 行事	全体研修会	昼食・ 休憩	受付待機 時間	分科会	閉会 行事

9 内 容

- (1) 全体研修会 演題 『「主体的・対話的で深い学び」を目指した言語活動の充実』
名古屋国際大学外国語学部 英米語学科 教授 太田 光春 先生
- (2) 分科会研究協議

分科会	テーマ	提案・発表者
第1分科会	「選択」と「共有」を取り入れた授業実践について	美里町立美里中学校 福島 克明先生
	5 ラウンドシステムによる授業実践の成果と報告	川越市立大東西中学校 村本 秀男先生
第2分科会	話す活動につなげる音声・音読活動	横瀬町立横瀬中学校 栗嶋 絢葉先生
	児童が話せるようになるための実践 ～児童に無理なく4技能を育む「7つの言語経験順」を通して～	深谷市立深谷小学校 水野 浩廉先生
	3年間のゴールを見据えた授業デザインと評価 ～話すこと・書くこと・リテリング～	蓮田市立蓮田中学校 杉山 寛先生
第3分科会	主体的に問いを追求し、解決しようとする児童の育成	新座市立新開小学校 福富ニール まどか先生
	自己発信のできる生徒の育成を目指して ～基礎基本の育成と単文から発信練習～	東秩父村立東秩父中学校 吉野 奈津子先生
	AI学習プラットフォーム「World Classroom」を活用した 英語による発信力の育成	さいたま市立慈恩寺中学校 西田 朋加先生
第4分科会	ICTとAIを使った授業改善	上尾市立大谷中学校 廣瀬 駿先生
	言語活動を主軸とした表現活動の実践	羽生市立西中学校 金子 直樹先生

会 次 第

<受付待機時間> 9:10～9:30

<開 会 行 事> 9:30～9:50

- | | | |
|---|----------|---------|
| 1 | 開会のことば | 副会長 |
| 2 | あいさつ | 会 長 |
| 3 | 教育長あいさつ | 開催地区教育長 |
| 4 | 指導者紹介 | 副会長 |
| 5 | 日程説明・諸連絡 | 研修部 |

<全 体 研 修> 10:00～11:40

- | | | |
|---|--------------------------------|-----|
| 1 | 講師紹介 | 副会長 |
| 2 | 講演 | |
| | 『「主体的・対話的で深い学び」を目指した言語活動の充実』 | |
| | 名古屋国際大学外国語学部 英米語学科 教授 太田 光春 先生 | |
| 3 | 謝 辞 | 会 長 |
| 4 | 諸 連 絡 | 研修部 |

< 昼 食 ・ 休 憩 > 11:40～12:45

<受付待機時間> 12:45～13:00

<分科会・指導講評> 13:00～16:20

- | | |
|---|---------|
| 1 | 提 案 |
| 2 | 研 究 協 議 |
| 3 | 指 導 講 評 |

< 閉 会 行 事 > 16:20～16:30

講 演

『「主体的・対話的で深い学び」を目指した言語活動の充実』

名古屋国際大学外国語学部 英米語学科
教授 太田 光春 先生

第1分科会

- ・「選択」と「共有」を取り入れた授業実践について

美里町立美里中学校 福島 克明

- ・5 ラウンドシステムによる授業実践の成果と報告

川越市立大東西中学校 村本 秀男

本研究は「選択」と「共有」を軸に「疑問詞＋to 不定詞」の授業改善を図った実践報告である。キャンプ企画を題材に、必要な役割のメンバーを募るスカウト活動を導入した。生徒は目的達成に必要な表現を自ら選択して伝え合い、文法を「自分の意思を伝える道具」として主体的に活用する姿が見られた。スカウト活動を通して相手に応じて表現を調整するやり取りも生まれ、文法を使う意味や楽しさを実感させる成果が得られた。

1. はじめに

日々の授業において、「どうすれば生徒たちに英語の楽しさや、使う意味を分かってもらえるか」といつも悩んでいる。これまでの授業は、教師である私が前に立って文法を説明し、生徒に繰り返し練習させるという形になりがちであった。しかし、ただ教え込まれるだけの授業では、生徒が自分で考えて英語を使う力は育たないのではないか、と思うようになった。そこで、文部科学省の資料にある「個別最適な学び」や「協働的な学び」という言葉に出会い、生徒が主体的に学べるよう、生徒自身が学習の内容や方法を選ぶ「選択」の場面と、お互いの考えを伝え合う「共有」の場面を、毎日の授業の中に意識して組み入れる挑戦を始めた。

2. 授業の実践（3年生「疑問詞＋to 不定詞」の学習）

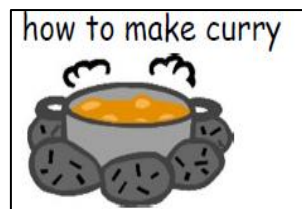
3年生の「疑問詞＋to 不定詞 (how to ～など)」の単元で研究授業を行った。この表現を使うことで、「自分たちの生活の中でどんなことが伝えられるようになるか」を、生徒たち自身に実感してほしいと考えた。生徒一人一人が「表現を使う意味や必然性」を実感できるよう、単なる文法説明に終始しない授業作りに挑戦した。

導入では、生徒にとって身近で行ってみたいくなるように「キャンプを成功させるた

めに、自分たちで何ができるか、何が必要か」という問いかけをした。生徒からは「BBQに何をかうか (I know what to buy for BBQ.)」や「テントを立てられる (I know how to put up a tent.)」など、色々なアイデアや表現の種が次々と出された。

引き出した表現をもとに、「自分たちのグループで担当したい役割や企画について、必要な情報を英語でやり取りする」というペア・グループ活動を実施した。

教師から指定された英文を機械的に言うのではなく、生徒自身が「自分の企画を成立させるためには、何を相手に問いかけるべきか」を考えて言葉を「選択」する場面を意識的に設けた。活動中、生徒たちは「BBQの買い出し担当が必要だから、Do you know what to buy? と聞いてみよう」「カレー作りが得意な人を探さなきゃ」など、目的意識を持って英語のやり取りを「共有」していた。



←資料

自分たちのグループのメンバーができないことができる人をスカウトする活動をした。

授業の最後には、「楽しかった」で終わらせず、なぜその表現を使ったのかという「思考の根拠」と言語活動を結びつけるための振り返り（リフレクション）を行った。生徒

の振り返りシートからは、以下のような達成感を見て取ることができた。

生徒の振り返り

- | |
|---|
| ・ クラスの人に～の仕方を知っているかをたずねることができた。〇〇くんが、B B Qが得意だと分かった。 |
| ・ 今日の活動で『何をしたら良いか (what to do)』や『どうやってテントを立てるか (how to put up)』のように、相手に役割を伝えるために、この表現が便利だとわかった。 |

3. 研究の成果

本実践において「選択」と「共有」の場面を意図的に組み込んだ授業を展開した結果、従来の「文法規則を覚えて機械的に練習する」授業では見られなかった、「目的・場面・状況に合った表現を自ら選び出す姿」が生徒に多く見られた。「キャンプを成功させるためにどの表現が必要か」という目的意識を持たせたことで、疑問詞+to 不定詞を「暗記すべき公式」ではなく、「自分の意思や計画を伝えるための有用な道具」として主体的に捉え直させることができた。

また、スカウト活動という「相手が何を知っているか分からない状態」のある協働的な学習の必要な場面を設定したことで、生徒は「友達にうまく伝わらないから、別の表現 (what to buy など) に変えてみよう」などと、自ら学習プロセスを調整・修正しながら、他者と関わり合って対話を構築することができた。

4. 今後の課題

一方で、指導主事からの指導助言や実際の授業分析を通じて、以下のような今後の改善に向けた明確な課題も浮き彫りになった。

生徒が自分から表現のきまりや有用性に気づくプロセスを重視したかったが、生徒が沈黙した際に教師が焦ってしまい、途中で「how to を使って話して」と直接的な指示を出してしまった。これにより、生徒が試行錯誤して表現を「選択」する余地を教師自身が狭めてしまった。今後は、生徒の思考を支える十分な「足場かけ（視覚的な支援や事前のゴール提示など）」を用意し、教師が焦って介入しすぎない指導のあり方を追求する必要がある。

また、グループ活動において情報の共有を促したものの、「なぜその情報を友達とやり取りしなければならないのか」という実際の生活に近い必然性が、一部で形式的（ただ質問の時間だから質問する）になってしまいう場面があった。今後は、活動の初めに「このイベントに1人でも多くの参加者を集めるため」といった具体的な課題解決場面やゴールをはっきりと設定し、生徒が「心から共有したくなる本物の文脈」をデザインすることも課題として捉え、生徒の主体的な学びを引き出す授業づくりに努めていきたい。

5. おわりに

本研究授業および学校訪問を通じた実践検証により、生徒に「主体的に学ばせる」ための授業づくりの奥深さを改めて実感するとともに、知っている言葉を懸命に交わそうとする生徒たちの無限の可能性を再発見することができた。今後は、目の前の生徒たちが「この表現を使ってみたい」「友達の話英語で聴いてみたい」と自然に思えるような、温かくて心理的安全性のある教室環境づくりを基盤とし、目的が明確で必然性のある授業デザインを地道に積み重ねていきたい。

5 ラウンドシステムによる授業実践の成果と報告

川越市立大東西中学校 村本秀男

5 ラウンドシステム(教科書を1年間で4～5回繰り返し学ぶ学習形態、以下「5 ラウンド」)は、授業改善の1つの手法として注目を浴びている。川越市では令和9年度より段階的に導入を予定しており、それに伴い本校では令和7年度より市の委嘱を受けてモデル校として研究を進めている。本発表では、昨年度に私が担当した1年生の授業実践の成果や課題を報告し、研究2年目を迎えた今年度の生徒の様子について、実践報告をする。

1 はじめに

令和9年度より川越市では、全中学校で5ラウンドの導入を予定しており、それに先だって、本校では令和7年度より市の委嘱を受けてモデル校として研究を進めている。5ラウンドをすでに導入している熊谷市の中学校の授業視察を行ったり、5ラウンドの先駆者である拓殖大学の西村教授から直接ご指導を受けたりしながら、授業実践を進めている。1年以上授業を進めていく中で、生徒の変容や確かな手応えを感じている。本発表を通して、5ラウンドの授業の成果や課題を挙げ、より実践的なコミュニケーションを図る資質・能力の育成について考える。

2 5 ラウンドの概要

5 ラウンドは授業改善の1つの方法として考案され、1年間を通して教科書を4～5回繰り返し学習する指導法である。「十分な繰り返し」、「意味を考えた生徒とのやり取り」を重視しており、授業内容を図示すると以下の通りである。



実際の授業では、帯活動として毎時15分～20分程度のスモールトーク、30分～35分程度の教科書中心の展開を行っている。

生徒は、教科書の8つのユニットを、目的の異なる5つのラウンドを通して学習する。最も負担の少ないラウンド1のリスニングから、本文の内容を自分の言葉で伝えるラウンド5までを1年間通して行う。何度も同じ文に触れることで生徒は自然に英語を身につけ、帯活動を通してインプットした英語を実際に使用することで、実践的なコミュニケーション能力を身につけることができる。

3 授業の実践報告

(1) 生徒の授業への意識と変容

1年次の各学期末にアンケートをとった結果は以下のとおりである。

表1 英語の授業は好きか

	好き・どちらか といえば好き	嫌い・どちらか といえば嫌い
1学期末	96.1%	3.9%
2学期末	91.6%	8.4%
3学期末	96.0%	4.0%

表2 英語の授業への理解度

	80%以上	80%未満
1学期末	80.4%	19.6%
2学期末	80.0%	20.0%
3学期末	67.4%	32.6%

5ラウンドの授業を肯定的にとらえ、前向きに取り組んでいる生徒が多く、繰り返すことに意義を感じている生徒が多数いた。また、ラウンドごとのハードルが低く、質や正確性よりもインプットの量を求める指導によって、英語が苦手な生徒にも負担が低かったと思われる。

（２）実際の生徒の様子

① スピーキング活動の実践

1 分間のスモールトーク（英語による雑談）を、ほぼ毎時間行った。話すトピックは、小学校で学んだ自己紹介、自分や相手の好きな〇〇、趣味、学校行事について、先週末にしたこと、最近話題の〇〇など、生徒が話しやすいものを設定し、意味内容を考えて 1 分間英語でコミュニケーションをとり続けることを意識させて取り組ませた。そのために、ティーチャートークを充実させたり、中間指導を充実させたり、ただやらせるだけでなく生徒の観察と見取りを意識して行った。生徒の間違ひは気にしすぎず、アウトプットの量を増やすことで、生徒は間違えることに臆することなく、自信を持って発話することができるようになった。一方で、教科書の本文で出てきた文をアレンジして使う生徒も現れ、自然と英語を身につけている様子も見られた。

表 3 英語がペラペラになった実感（学年末）

かなりある	26.5%
まあまあある	58.2%
あまりない・ない	15.3%

② ライティング活動の実践

スピーキング活動で取り扱った自己紹介、スモールトークで話した内容、ラウンド5でリテリングした内容等を、繰り返し書かせる指導を行った。はじめからただ書かせるのではなく、書く内容についてペアでやりとりや発表をさせ、十分なアウトプットを行った上で書かせた。いたってシンプルな活動だが、従来のような条件英作文とは異なり、身近な話題や何度も話した内容を書くことは、生徒にとって負担感が少ないように感じる。スピーキングと同様に、間違ひは気にしすぎず、書く量を意識させて指導をした。はじめは正しい文を書けない生徒もまったく書けない生徒もいたが、数をこなすうちに書く量が増え、正確性も増していった。また、生徒の「書きたい。」という気持ちを引き出すことで、より多くの文を書いたり、書くことに自信を付けたりする生徒が多く見受けられた。

（３）教員側の意識の変化

以下、私や本校の教員、川越市内のモデル校の先生方の意識の変化である。

- ・授業の流れが決まっており、教員も生徒も取り組みやすい。
- ・内容を重視するため、英語学習が目的ではなくコミュニケーションの手段として扱える。
- ・それぞれのラウンドの目的が明確であり、長い英文への抵抗感が少ないことで活動にも取り組ませやすい。
- ・生徒の活動時間が増え、その様子を見て支援や指導ができるようになった。

4 授業の成果

5 ラウンドの授業では、より自然な言語使用によって、自然と英語が身につく場面が増加した。意味内容や場面、状況に意識を向けさせることで、英語の使用がコミュニケーションの手段となり、英語を英語で理解できる生徒も増えた。また、帯活動や教科書を繰り返して学習することで、生徒の負担感を減らし、達成感や安心感を与えることができた。質よりも量を意識した活動で、英語を苦手と感じている生徒にも有効であった。そして、何よりも「英語の授業が好き」と回答する生徒が増えたように感じる。

5 今後の課題

5 ラウンドのそれぞれの活動への目的を教師がきちんと理解し、生徒がその目的を達成できるように指導していく必要がある。また、反復練習に対する授業へのモチベーションを維持させるために、教師がさまざまな工夫をしていく必要がある。同じ文を繰り返すことは語学学習にとって大変効果的であると同時に、退屈さを感じる生徒も少なからずいたため、教師の工夫や力量が問われると思う。

6 おわりに

生徒にとって英語を学ぶことは、コミュニケーションを図る資質・能力を身につけることである。5 ラウンドの授業は、それを達成できる指導方法の1つとして効果的な方法だと考える。

第2分科会

- ・話す活動につなげる音声・音読活動

横瀬町立横瀬中学校 栗嶋 絢葉

- ・児童が話せるようになるための実践

～児童に無理なく4技能を育む「7つの言語経験順」を通して～

深谷市立深谷小学校 水野 浩廉

- ・3年間のゴールを見据えた授業デザインと評価

～話すこと・書くこと・リテリング～

蓮田市立蓮田中学校 杉山 寛

話す活動につなげる音声・音読指導

横瀬町立横瀬中学校 栗嶋 絢葉

英語を『話す』ことに苦手意識をもつ生徒に、どのような手立てを講じればその意識が軽減されるのかについて考え、実践している。教科書の内容を基に、実生活で使える英語力を育成するために、目的・場面・状況を整理し、即興性も交えながら練習を重ねている。生徒の生きる英語力を育む上で、どのような3年間の見通しを立て、どのように学習内容を積み重ねていくかについて考えた。

1. はじめに

中学校学習指導要領(平成29年告示)解説の音声の取り扱う内容には、(ア)現代の標準的な発音、(イ)語と語の連結による音の変化、(ウ)語や句、文における基本的な強勢、(エ)文における基本的なイントネーション、(オ)文における基本的な区切りが挙げられている。それらを理解し、言語材料と効果的に関連付け、実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けることが求められている。

また今年度中学1年生を担当し、学期始めに英語に対するアンケートを実施した。全体の半分の生徒が英語を得意、または好きと回答し、「英語で話すのが楽しい」、「海外に興味をもっているため、英語を身につけ、外国の方と積極的に話してみたい」と前向きに英語の授業を捉えている。一方で半数の生徒が英語の授業を苦手、または嫌いと回答し、コロナ禍の影響や学年の特性を強く感じた。人前で話すことに苦手意識をもち、英語に対して「全体の前で発表する教科」「英語で話すのが恥ずかしい」という『話す活動』での消極的なイメージが強い。その結果を受け、音読活動や音声を指導する中で、『話す活動』につなげる工夫ができないか、また生徒の苦手意識が少しでも軽減できないか研究したいと考え、この主題を決定した。

2. 研究の実際

(1)リーディングテストまでの流れ

ア 音声指導

本校では開隆堂 Sunshine English Course を使用している。年度始めに小学校の内容を復習する Get Ready のページでフォニックスに触れている。RとL / FとV / MとNの発音の違いについて例文を踏まえて練習をした。日本語と英語の共通点や相違点を意識する機会になっているため、より重点的に指導した。

また教科書の内容について確認後、新出単語を確認する際、生徒たちに自力で英単語を読ませてみたり、文章の中で単語がつながり、音声に変化するリンキングを見つけさせたり、スペルから読み方を推測させる機会を意図的に設けている。時には英単語と発音の共通点を確認し、生徒が英単語を覚えやすいように工夫している。

イ 教科書の音読練習

私が音読活動を進める手順は以下である。

(ア) モデルリーディング

(イ) バズ・リーディング

(ウ) リピーティング

(エ) リード&ルックアップ(暗唱)

(オ) 日本語から英文へ音読

(ア) モデルリーディングでは、注意すべき要点を説明し、生徒と目指す目標を共有する。その後の(イ) バズ・リーディングでは、生徒が上手く発音できていないポイントや英単語を机間指導しながら適宜確認する。

(ウ)リピーティングは教科書を見ながら、または閉じさせて音読練習を行う。内容を自分で整理しながら言えているか様子を観察し、中間指導を行う。

(エ)リード&ルックアップ、教科書の暗唱活動では穴あきワークシートを準備している。日本語訳を見て重要表現や新出単語が言えるかを確認し、その後の(オ)内容再生音読につなげる活動として位置づけている。

また内容に応じて本文の流れに合わせた生徒の考えた1文を足し、本文の内容に一工夫を加えている。穴あきの量を変えることで生徒自身がレベルを選んで挑戦することができたり、表と裏で穴あきの場所が異なるワークシートにして、ペアで確認させたりすることもできる。



(2)リーディングテストの実施

以上の音読練習終了後リーディングテストを実施している。その際には生徒を輪にして行う「ぐるぐるチェック」に取り組んでいる。生徒を教室内に大きな輪になるように配置し、その輪の中を教師やALTがぐるぐると回りながら行う。1文ずつ、またはまとまりのある文章で区切りながら確認をしていく。1回目は教科書を見て音声面で、2回目は本文の内容を踏まえた暗唱ができているかの確認と段階的に難易度を変えている。

3. 研究の成果

今までは教師の質問や問いかけに英単語で答える生徒が多かったが、この取組を始めてか

ら、生徒から文章での発語が増えてきた。また、ワークシートを使って進んで繰り返し家庭学習を行ったり、デジタル教科書を聞き練習をしたりする生徒もいる。帯活動で行う1分間トークでも、自由な質問や自分の考えを相手に発信することが少しずつできるようになり、英語で話すことや間違えることに対する不安や恐怖心は軽減してきている。また、年度始めと同様のアンケートを行った結果、得意または好きと回答した生徒が3分の2に増え、英語に興味を持ち始めた様子が見られた。

4. 今後の課題

音声・音読指導を中心としているため、生徒の『話す活動』の基盤とはなるが、アウトプットまでつなげることが難しい。音読活動の中で語彙や文章を覚え、自分なりに工夫を加え、内容を充実することはできるが、まとまった文章を話したり、即興性のある会話をしたりすることに対してはまだ困難さを感じている生徒が多い。教師側が「目的・場面・状況」をより明確にし、内容を膨らませていくことが課題である。

また、中学校学習指導要領の内容の取扱い内に、「関心のある事柄について」・「日常的话题について」・「社会的な話題に関して」と明記されている。学年ごとに教科書の内容との関連度を考え、自分の主張を踏まえながら話そうができるように、課題を選定する必要がある。

5. 今後の見通し

本研究は中学1年生を対象として行っているため、研究を始めて約3か月である。そのため、継続的にこの活動を行い、生徒の変容を見届けなければならない。また今後、生徒の即興性を高めるために、教科書に付随している“Reading”のワークシートを活用することを考えている。教科書の内容と関連しているため、学習したことを理解した上で、自己の考えや経験を表現できる機会を設けたい。

児童が話せるようになるための実践
～児童に無理なく4技能を育む「7つの言語経験順」を通して～

深谷市立深谷小学校 水野浩廉

小学校の外国語教育において、原稿なしでは話せない児童の課題を解決するため、「7つの言語経験順」を取り入れた授業を小学6年生に実践した研究報告である。「聞くこと」から、「話すこと」・「読むこと」・「書くこと」へ無理なくつなげる指導を行った結果、授業を重ねるごとに児童の正しい発話量と正確性が大幅に向上し、文字に触れる機会も確保できた。一方、個々の児童への支援や、今後に向けた中長期的な視点での効果検証が課題として挙げられる。

1 主題設定の背景

筆者自身、これまでの外国語活動・外国語科の指導について多くの課題を抱えてきた。実際児童に話させてみると、「原稿（文字）がないと話すことができない」「原稿（文字）の上にカタカナで読み方を書いて読み上げる」というような状況を経験したことがある。自身の指導力不足を痛感し、これまで当然のように行ってきた授業の進め方に疑問を抱くようになった。

2 研究内容

児童の言語習得過程を踏まえ、「聞くこと」から「話すこと」、さらに「読むこと」「書くこと」へと無理なくつなげる「7つの言語経験順（東京学芸大学粕谷教授が提唱）」を取り入れた授業を構想した。特に、「話すこと」に着目し、児童の発話量と正確性にどのような変容が見られるかを明らかにすることを目的とした。

尚、「7つの言語経験順」の詳細については、右に掲載されている二次元コードから参照されたい。



3 研究方法

本稿は、令和7年11月に筆者の勤務する公立小学校6年生76名を対象に行った一単元分の授業実践である。

尚、授業実践の詳細については、右に掲載されている二次元コードから参照されたい。



（①児童の発話内容について）

第2時・第6時・第7時において、授業の振り返りをする際、児童一人ひとりにその日の授業で学んだ表現を情報機器端末（iPad）上のアプリ（Keynote）を用いて提出させた。提出された児童の発話文を「正しく言えている文」と「間違っている文」に分類し、計3回の発話そ

れぞれにおける「正しく言えている割合」や「間違っている割合」を比較、分析した。【表1】【表2】

また、児童の発話内容を分析するため、参加者76名のうち、6名の児童を抽出した。抽出した児童の内訳は、民間の英語教室等に通う児童2名、通信教材等で英語の家庭学習をする児童2名、学校の外国語の授業でのみ英語に触れる児童2名の合計6名である。【表3】

（②児童への訂正フィードバック）

本単元において、毎時間授業の様子を録画し、その映像をもとに教師の児童に対する発話内容を分類した。これは、授業者が第2時・第6時・第7時において、児童に対して、どのような訂正フィードバック（corrective feedback: 以下 CF）を与えていたのか、発話内容やその意図を可視化するためである。

授業中における児童へのCFが、第2時・第6時・第7時において、どのように変化したかを可視化するため、授業映像をもとに授業中に誤りを含む児童の発話等に対して行われた教師の発話を抽出・分類した。【表4】

CFの分類には、Lyster & Saito (2010)の枠組みに基づく6種類に、類推に基づくCF（Thomas, 2018）を加えた7種類をそれぞれカウントした。

4 研究結果

【表1】文発話する児童数の変容

校時	文発話とその人数
第2時	0文—0人 1文—76人
第6時	0文—0人 1文—0人 2文—0人 3文—74人 4文—1人 5文—1人

第 7 時	0 文—0 人
	1 文—0 人
	2 文—0 人
	3 文—8 人
	4 文—7 人
	5 文—50 人
	6 文—5 人
7 文—6 人	

【表 2】全ての文発話における正誤数の変容

校時	文発話の合計	正しく言えている文（割合）	間違っている文（割合）
第 2 時	76	39（約 51%）	37（約 49%）
第 6 時	231	167（約 72%）	64（約 28%）
第 7 時	374	306（約 82%）	68（約 18%）

【表 3】抽出した児童の発話内容の推移（一部抜粋）

（※付随情報が加えられた発話は黄色のハイライト。修正のあった発話には緑色のハイライトで表示）

児童 E の発話内容

第 2 時 授業終了後	My best memory is ... (the) sports day.
第 6 時 授業終了後	My best memory is ... (the) sports day. I enjoy (ed) dance(dancing). It was fun.
第 7 時 授業終了後	What's your best memory? My best memory is ... (the) sports day. I enjoyed dancing It was fun.

【表 4】第 2 時、第 6 時、第 7 時における種類別の CF 頻度及び総数

	インプット供給型			アウトプット誘発型			類推	総数
	リキャスト	明示的な訂正	明確化の要求	繰り返し	誘導	メタ言語的手がかり		
第 2 時	25	0	0	0	9	0	60	94
第 6 時	21	0	0	0	9	0	51	81
第 7 時	34	0	0	0	12	1	22	69
合計	80	0	0	0	30	1	133	244

5 成果と課題（○成果▲課題）

- 「7つの言語経験順」をもとにした授業を構成すること（7つの言語経験順の①～④）で、単元を通して、間違いのある文発話の割合（48.6%→27.7%→18.1%）が減り、正しい文発話の割合（51.3%→72.2%→81.8%）が増えるなど、少しずつではあるが、児童の「話す力」をつけることができた。
- 「7つの言語経験順」をもとにした授業を構成すること（7つの言語経験順の⑤～⑦）で、児童に「音声」に触れる機会（音声による受信・音声による発信）だけではなく、「文字」にも触れる機会（文字による受信・文字による発信）を与えることにもつながった。

- ▲「7つの言語経験順」をもとにした授業を（7つの言語経験順の①～⑦）を行ってきたが、発話内容に変容の見られない児童や教師の支援がないと発話につながらない児童も数名いた。

- ▲今回は研究の都合上、1単元のみ（1ヶ月程度）の実践であった。今後は中長期的な視点で児童が言葉を身につけていく過程を検証することが今後の課題である。

6 引用文献

文部科学省（2017）「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語活動・外国語編」
 水野浩康（2026）『音声による豊かな言語活動の充実—頭を働かせ、心を動かして話すことのできる児童の育成を目指して—』令和 7 年度埼玉県長期研修教員研修報告書

3年間のゴールを見据えた授業デザインと評価

～話すこと・書くこと・リテリング～

蓮田市立蓮田中学校 杉山 寛

言語活動を通して、コミュニケーションを図る資質・能力を育成するために、3年間の英語授業を通して身につけさせたい力を具体的にイメージし、バックワード・デザインしながら授業を組み立ててきた。また、それを評価する基準を生徒と共有し、指導に役立てた。その一部、話すこと・書くこと・リテリングの活動を紹介する。

1 はじめに

私は、20年間英語教師として目の前の生徒に向き合ってきた。その中でも、特に力を入れてきたのが話すこと・書くことと、その評価である。評価は、生徒への波及効果が大きく、また、教師の指導改善の示唆を与えてくれるものである。3年間の英語授業を通して、身につけさせたい力を具体的にイメージし、バックワード・デザインしながら授業を組み立ててきたその一部を紹介する。

不合格	「4秒ルール」により不合格
3級	多少つまりながらも、聞き返したり、単語を並べて、何とか英会話(?)ができる。
準2級	英文を使って、理由や具体例を伝えたりして、英会話ができる。
2級	つながぎ言葉を使ったり、理由や具体例を伝えたり、質問をしたり、とてもスムーズな英会話ができる。(笑顔で)

2 研究の実際

(1) 英会話検定

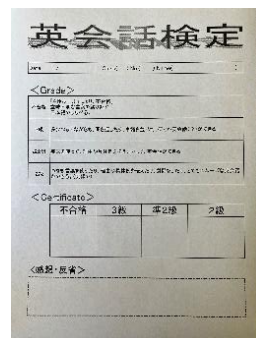
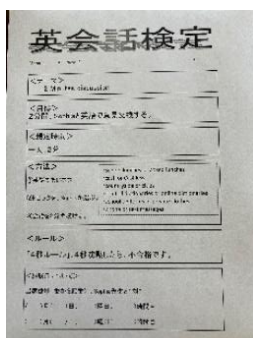
2級～5級の目標を設定し、ALTと一対一でのやりとりを中心に、学期に1～2回程度の会話テストを実施している。身近な話題から社会的な話題へ、準備から即興へと、レベルを上げて、繰り返し指導をしている。また、検定に向けては、授業前半の10分程度の帯活動として練習したりしている。

<資料>

最終ゴール(2級):社会的な話題について、つながぎ言葉を使ったり、理由や具体例を伝えたり、質問をしたり、とてもスムーズな英会話が即興で2分間できる。

トピックの例: Cash or Cashless

評価: 思判表と主体態を一体的に評価。



2年時のゴール(3級): 身近な話題について、つながぎ言葉を使ったり、感想を言ったり、質問をしたり、とてもスムーズな英会話が即興で2分間できる。

トピックの例: My Dream

1年時のゴール(4級): 論理的にまとまったスピーチができ、質問に対して受け答えが1分半スムーズにできる。

トピックの例: My Winter Vacation

<生徒の感想>

- ・ALTの言ったことが分かって、楽しく会話できた。
- ・もっと笑顔で会話できるように、次回もがんばりたい。
- ・サッカーの外国人コーチとも英語で会話してみたい。

(2) 定期考査による Writing 課題

埼玉県公立高校入試(学校選択問題)を意識して、毎回の定期テストにおいて、継続的にまとまった量の英文を書かせる課題を出している。授業中にも練習の時間を取り、①接続詞などを使って、まとまりのある文を書くこと、②序論、本論、結論などの構成を意識すること、などを指導している。

<資料>

3年時のゴール：社会的な話題に対して、つながりや情報の内容を意識して、50語程度で書ける。

トピックの例：

If you had a time machine, would you go to the past or to the future?

評価：思判表と主体的を別々に評価

	5点	4点	3点	2点	1点	0点
文量 (思判表)	41語以上	31~40語	21~30語	11~20語	10語以下	無解答
つながり 情報の内容 (思判表)				意見 理由 つながり	基準から1つ 不足	基準から 2つ以上ない
正確さ (知技)	(ほぼ) Perfect	軽微なミス	ミス目立つ	伝わらない (語順×)	伝わらない	無解答

2年時のゴール：身近な話題について、事実や感想などを含めて、40語程度で書ける。

トピックの例：How was your school trip?

1年時のゴール：身近な話題について、つながりを意識して、5文で書ける。

(3) リテリング

教科書の内容の Post-Reading 活動として、プログラム毎にリテリングの活動を行っている。言語材料の定着と、題材に対する深い理解を目的としている。また、即興でのやりとりを含めることで、技能統合型の活動となる。そして、授業での成果を評価する場面として、ALT とのリテリングテストも実施している。

<資料>

3年時のゴール：本文の内容を1分半で、自分の意見を含めたりテリングができ、質問に答えられる。

評価：

	思判表	知技	主体的
A	・キーワード ・まとまり ・自分の意見	・語彙が豊富 ・主語・動詞 のある英文	・ジェスチャー ・声量 ・やりとり
B	上記-1	上記-1	上記-1
C	上記-2	上記-2	上記-2

2年時のゴール：本文の内容を1分半で、マッピングからリテリングができる。

1年時のゴール：本文の内容をキーセンテンスから、感想などを含めて、5文でリテリングができる。

3 成果と課題

(1) 英会話検定

○継続的に検定を行い、級が上がるという達成感が分かりやすい。

○ALT と一対一で会話をする本物のコミュニケーションの場面となる。

△社会的な話題については、語彙力不足を感じたので、計画的な語彙指導が必要。

(2) 定期考査による Writing 課題

○毎回の課題とすることで、生徒のよくあるミスを把握し、指導することができる。

○繰り返し使う表現 (First, Second や、because の使い方など) が定着する。

○採点基準を生徒と共有することで、教師の採点において、文法より内容にフォーカスしやすい。

(3) リテリング

○本文の内容理解が深まる。(文法的理解)

○代名詞の指す内容や、つながりへの意識が高まる。(cohesion、coherence)

○題材への興味・関心が高まる。

○統合的活動となり、プレゼンテーション力が高まる。

4 終わりに

言語活動を通して、コミュニケーションを図る資質・能力を育成するために、目の前の生徒と向き合い、指導の改善をしてきた。4技能5領域における3年間の生徒の姿を具体的にイメージし、そこに向けたスモールステップの指導を心がけている。英語をコミュニケーションの道具と捉え、自立した学習者を育てられるよう、今後も研修に励みたい。

第3分科会

- ・主体的に問いを追求し、解決しようとする児童の育成

新座市立新開小学校 福富ニール まどか

- ・自己発信のできる生徒の育成を目指して
～基礎基本の育成と単文から発信練習～

東秩父村立東秩父中学校 吉野 奈津子

- ・AI 学習プラットフォーム「World Classroom」を活用した
英語による発信力の育成

さいたま市立慈恩寺中学校 西田 朋加

主体的にコミュニケーションを図ることができる児童の育成

—全ての子どもたちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実践を通して—

新座市立新開小学校 福富ニール まどか

本研究は、外国語によるコミュニケーションの楽しさを十分に感じられていない児童にも、「伝える喜び」や「言えるようになる喜び」を味わわせたいという思いから始めた実践である。ICT を活用した個別最適な学びと、相手意識のある協働的な学びを組み合わせることで、児童が自分なりに表現を選び、伝えようとする姿が見られた。今後は、自分に合った学び方を児童自身が選べるよう支援していく。

1. はじめに

昨年度、私が初めて本校の5年生の外国語の授業を担当したとき、児童の学習に向かう姿を見て、強い課題意識をもった。学習の楽しさや必要感を十分に見いだせず、外国語の授業に期待や前向きな気持ちをもちにくい様子の児童が見られた。その姿を前に、私は何とか手立てを講じなければならぬと強く感じた。

私の研究の出発点は、「どうすれば、子どもが目をキラキラと輝かせるような、子ども主体の学び創りができるのか」という問いである。そのためには、教師が一方向的に教える授業ではなく、児童が「やってみたい」と思える目的・場面・状況を設定し、一人一人が自分に合った方法で学びながら、友達との関わりの中で表現を広げていく授業が必要だと考えた。

そこで本研究では、研究テーマを「主体的にコミュニケーションを図ることができる児童の育成」—全ての子どもたちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実践を通して—とし、第5学年の実践を通して、その在り方を探った。

2. 研究の実際

実践は、第5学年外国語科 CROWN Jr. 5 Unit 2 Lesson 5 “She can bake cookies.”で行った。本単元では、あこがれの人や身近な人のことを知ってもらうために、その人のできることや得意な

ことを伝え合うことをゴールとした。単元の目的・場面・状況は、「推しの魅力を多くの人に知ってもらうために、シンスタグラム（新開小学校インスタグラム）で発信しよう。—東野小へ届け、推しの魅力—」と設定した。自分の大好きな「推し」の魅力を市内の同級生に伝えるという活動にすることで、児童が自分事として捉え、伝えたい内容を主体的に考えられるようにした。

研究の手立ての一つ目は、やってみたいと思える言語活動の設定である。本単元では、単に “He can …” “She can …” を練習するのではなく、自分の「推し」の魅力を相手に伝えるという目的を明確にした。児童にとって「推し」は関心が高く、思い入れのある存在である。そのため、誰を紹介するか、どんな魅力を伝えるかを考えることが学習への入口となった。また、Lesson 3 で学習した友達紹介、Lesson 4 で扱った自分のできることの表現を生かしながら、「推し」ができること、得意なこと、性格や特徴へと表現を広げられるようにした。

二つ目は、ICT を活用した個別最適な学びの保障である。ロイロノートに音声付きヒントカードを用意し、自分が表現したいことを確認できるようにした。ヒントカードは、児童が紹介したい「推し」に合わせて作成し、小学生が使いやすい語彙で構成した。また、文のまとまりごとに色を変えることで、文構造を視覚的に捉えやすくした。これにより、児童は自分が紹介したい内容に合わせ

て、ヒントカードをもとに文を作ることができた。

三つ目は、見通しをもって取り組める授業構成である。授業の流れを「1st challenge → キーセンテンスの確認 → 個別タイム → 2nd challenge → 紹介したいことを整理する時間」とパターン化した。最初に今の自分の力でやってみることで課題を自覚し、その後必要な表現を確認し、自分に合った方法で練習したうえで再び友達とのやり取りに挑戦する流れである。また、本時のめあてはレベル別に示し、児童が自分で目標を選べるようにした。これにより、児童が受け身ではなく、自分の学びの見通しをもって授業に参加できるようにした。

四つ目は、個別最適な学びと協働的な学びを結び付けたことである。個別タイムでは、関連動画を視聴する、ヒントカードを聞く、教師に尋ねる、友達と練習するなど、児童が自分に必要な学び方を選んで取り組めるようにした。その後、準備ができた児童から友達に「推し」を紹介する時間を設け、学んだことをすぐに使って確かめられるようにした。さらに、中間指導では、既習事項を使って詳しく伝えていた児童の表現を全体で共有し、友達のよさを自分の学びに生かせるようにした。

3. 研究の成果

本研究を通して、外国語学習に前向きさをもちにくかった児童にも、少しずつ主体的に学びに向かう姿が見られるようになった。特に、「推し」という児童にとって身近で関心の高い題材を扱ったことで、「伝えたい」という思いをもって学習に参加する児童が増えた。誰を紹介するか、どの魅力を伝えるかを考える段階から、自分なりの思いをもって取り組む姿が見られた。また、ICTを活用した個別タイムは、児童が自分の課題に応じて学ぶための有効な手立てとなった。既に言いたいことがある児童は動画視聴や練習に進み、新しい表現が必要な児童はヒントカードや教師の支援

を活用するなど、それぞれが必要な学び方を選んでいった。学習の進度や理解に差がある中でも、自分に合った形で学びに参加できたことは、学習への前向きな姿勢につながったと考える。

さらに、個別に準備したことを友達とのやり取りの中で試し、また見直すという流れの中で、表現が少しずつ定着していった。最初は単語だけで伝えようとしていた児童が文で伝えられるようになったり、紹介する内容を一文増やそうとしたりする姿も見られた。ここに、私が願ってきた「言えるようになる喜び」の芽生えがあったと感じている。

4. 今後の課題

一方で、課題も残っている。第一に、個別タイムの活用には差があり、自分の課題に応じて学び方を選べる児童がいる一方で、何をすればよいか迷う児童もいる。今後は、自分に合った練習の仕方や課題の見つけ方を振り返らせる支援が必要である。

第二に、協働的な学習では練習相手が固定化されやすいことである。コミュニケーションが苦手な児童ほど、自分から友達に声をかけることが難しい。主体性を保障しながら、他者と関わる力も育てるためには、専科としてどこまで支援し、どこから児童自身に委ねるのか、その在り方を今後さらに考えていく必要がある。

第三に、表現の定着や、やり取りを続ける力には個人差がある。ヒントカードがあれば伝えられても、カードがないと止まってしまう児童もいる。今後は、学んだことをその場限りで終わらせるのではなく、年間を通して繰り返し活用できるようにしながら、他者と関わる力や会話を続ける力を育てていきたい。

自己発信のできる生徒の育成を目指して
～基礎・基本の育成と単文からの発信活動～

東秩父村立東秩父中学校 吉野奈津子

英語で主体的に自己発信できる生徒の育成を目指し、基礎・基本の定着と単文による発信活動を継続的に実践した。フォニックスや語彙・文法の反復学習に加え、一問一答や自己表現活動を意図的に設定し、成功体験を積ませることで表現への自信と意欲を高めた。また、習熟度に応じた教材や授業のUD化を図り、全ての生徒が学びに向かえる環境づくりに取り組んだ。

1 テーマ設定の理由

近年の学習指導要領では、単に英語の知識を得るだけでなく、自分の考えや気持ちを英語で表現し、相手と「やり取り」をしながら協働的にコミュニケーションを図る資質・能力の育成が重視されている。しかし、日々の授業においては、間違いを恐れる気持ちや語彙・文構造の定着不足から、自分の思いを英語で表現することにためらいを感じる生徒が少なくない。相手と豊かな対話を展開するためには、まず「伝えられた」という確かな手応えと、表現の基盤となる基礎・基本の定着が不可欠である。そこで本研究では、短い単文を用いた一問一答や自己表現活動を意図的・継続的に設定し、スモールステップで表現へのハードルを下げるアプローチをとった。単文での発信活動は、生徒にとって取り組みやすく、自分の思いを英語で表現する第一歩となる。さらに、学習に対する苦手意識や得意・不得意の差に応じるため、フォニックスを取り入れた帯活動や選択制ワークシート等の授業のUD化を推進した。これにより、全ての生徒が安心して主体的に学びに向かい、「伝わる楽しさ」を実感できる環境を整えた。

以上のことから、基礎・基本の確実な定着と単文での発信活動を通して、生徒一人一人が自信を持って主体的に自己発信できる力の芽を育てることを目指し、本テーマを設定した。

2 研究の方法

(1) 帯活動を通しての基礎基本の定着

- ①フォニックス活動を通しての基本的な英単語綴り習得
- ②チャンツや書きかえ練習での語彙の獲得
- ③既習表現を使った一問一答の活動
- ④既習文法の復習

(2) 意図的な自己発信の場の設定

- ①毎時間の簡単な一問一答の場
- ②新出文法での自己表現の場
- ③絵や単語のカードを使った表現の場
- ④ペアや小グループで練習し、教師とも話す場
- ⑤会話活動を経た結果の書く練習

(3) 全ての生徒が学びに向かうための授業のUD化

- ①習熟度に合わせたプリントの作成
 - ア 教科書の読みや意味を掲載
 - イ 追加問題や単語練習欄の掲載（追加ポイント有り）
 - ウ 会話活動のルビ有り無し選択
- ②新出単語のスライドの工夫（図2）
- ③板書の取り方の選択
 - ・ノート、教科書、教科書の読みが載っているプリント、いずれでもよい。

3 研究の実際と成果

(1) 帯活動でフォニックスを開始して3カ

月、a,e,i,o,u と sh/ch/ph/th とサイレント e を扱い、単語テストもそれらを使ったものを意識して編纂した。10問ずつではあるが、8割以上正答を合格としたところ直近のものは全員合格している。

一問一答活動では Do you like ○○? のように自分で考える文がいくつかあるので、相手を見ながら様々な言葉を入れて聞くよう工夫している姿が見られた。既習文法を使った会話活動でも相手の新たな一面を知って楽しそうに活動をしていた。

(2) 毎時間の最初に Are you ~? を使ったペアの会話を入れた。thirsty などの生徒にとってなじみがなかった単語も普通に出るようになってきている。チャンツの語彙とあわせて徐々に増やしている途中である。また、絵や単語カードを使って1人1人が話す回数や時間を増やした。教師は机間指導中に時々相槌を打ちフィードバックを返していった。小グループでも、相互に聞き合い相槌を打ったり、間違いを相手に合わせた方法で指摘したり、助言をしていた。

(3) 年度当初は英語が苦手な生徒にあわせてワークシートを作成していたが、アンケートから得意な生徒もより多くの問題や書き練習を必要としていることが分かり、自分で選べるワークシートの作成に取り組んだ。表面には全員が授業中や宿題で取り組むものを、裏面に追加の問題や高難度の問題、単語練習の欄を作り、更なるポイントを獲得できるようにした。裏面の期限は特に設けていないので、自分のペースで進めたり取組の有無を決められる。

また、教科書本文の読みや意味が載っているシートを配布し、音読練習時や板書時、家庭学習時に使用するなど使い方は生徒に任せている。

新出単語もイメージをつかみやすいスラ

イドで練習を行っているが、次時でシンプルなスライドを使って復習と確認を行った方が記憶に残った。

4 今後の課題

単文による発信活動の継続により、生徒は間違いを過度に気にせず自己発信できるようになってきた。また、新しい文法や表現で分からないことがある際には、友達や教師に積極的に尋ねる姿も見られるようになった。今後は、単文から発展し、より自分の気持ちや考えを伝えられるようにする活動も取り入れていく。例えば、現在取り組んでいる「Re-question (問い返し)」や「相槌＋感想 (Oh, really? I like it, too.)」に加え、「Follow-up question (追質問)」をセットにした会話フォーマットを導入し、1往復(単文)から、2～3往復のラリーを目指す活動を帯活動に組み込んでいく。

また、単に事実(例: I like apples.)を言わせるだけでなく、一歩踏み込んで1学期に学習した「Why?/Because...」を付け加える習慣をつけたい。語彙力に不安がある生徒のために、「理由の選択肢カード」をUD化プリントで用意し、自分の気持ちに近いものを選んで表現できるようにサポートする。

さらに、リアルな「目的・相手・場面」を設定したタスク・パフォーマンス課題の導入(識)のある場面設定を行い、単文で学んだ表現を組み合わせ、最終的に数文のスピーチやカード作成、簡単なインタビュー活動に繋げる「帯活動と本時の言語活動や単元目標の連動」を図って、学ぶ意味を生徒に持たせたい。

AI 英語学習プラットフォーム「World Classroom」を活用した英語による発信力の育成

—教育 DX の視点を生かした個別最適な学びと対話活動の充実を通して—

さいたま市立慈恩寺中学校 西田 朋加

さいたま市独自のグローバル・スタディ（以下、G・S という）カリキュラムでは、単元ごとに「目的・場面・状況」が設定されているものの、それらを身近なものとして捉えられず、場面を具体的にイメージできない生徒が見られる。そこで、AI 英語学習プラットフォーム「World Classroom」の AI フレンズを活用し、外国の友人と実際に会話しているような状況を設定することで、生徒の英語による発信力の育成を図った。本実践では、AI を活用した個別最適な学びと実際のコミュニケーションにつながる対話活動を関連付け、生徒が自信をもって主体的に英語で伝えようとする姿勢の育成を目指した。

1. テーマ設定の理由

社会のグローバル化や AI 技術の急速な発展に伴い、英語で自分の考えや思いを伝え、他者と主体的にコミュニケーションを図る力がこれまで以上に求められている。また、学校教育においては、教育 DX の推進により、AI 等を活用した個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実が求められている。中学校学習指導要領においても、自分の考えや気持ちなどを英語で伝え合う力の育成が重視されている。

さいたま市では、G・S カリキュラムにおいて「目的・場面・状況」を明確に設定した言語活動を通して、実践的なコミュニケーション能力の育成を目指している。一方で、本校生徒の実態を見ると、設定された場面を身近なものとして捉えられず、相手意識をもって英語でやり取りすることに難しさを感じている様子が見られた。そこで、本校ではさいたま市で初めて AI 英語学習プラットフォーム「World Classroom」を導入し、外国の友人と実際に会話しているような状況を設定するなど、その特長を生かした授業実践を行った。AI を活用した個別最適な学びを実現するとともに、AI との対話を実際のコミュニケーション活動へつなげ、生徒の英語による発信力の育成を目指す取り組みを紹介する。

2. 研究の実際

単元の概要は、「海外からの転入生に、日本の学校文化（部活動・給食・掃除・委員会等）の紹介をする。自分の経験や事実をもとに、活動の様子について説明をしたり、ペアの説明を聞いて質問や意見を投げかけたりする。」という言語活動が設定されている。しかしながら、パフォーマンステストではクラスメイト同士で発表を行うため、相手が日本人であることから、相手意識を十分にもって説明を考えることが難しい様子が見られた。

そこで、以下に「World Classroom」を活用した実践例を紹介する。

(1) 自らが選んだ AI フレンズとの対話練習

「学校生活や行事を紹介しよう」【Level☆☆】
フレンズにあなたの学校を紹介しよう！どんな学校生活をして、どんな学校行事があるか伝えてみましょう。制服、部活動、給食、掃除などを行ったとある学校生活や、合唱コンクール、体育祭、文化祭といった行事についてフレンズに伝えるように話してみましょう。

Mission | 40語以上、単語を使ってみよう！ 10ターン以上、会話を続けよう！

会話履歴

What is school life like for you? What kind of school events do you have?
It's a sports festival. Music festival.

That sounds fun! What do you like most about the sports festival?
I like the Lily.

What do you like about the Lily?
No, I like leader.

Oh, I see! What do you like about being a leader?
No, no, no, no. I like, uh, Lily.

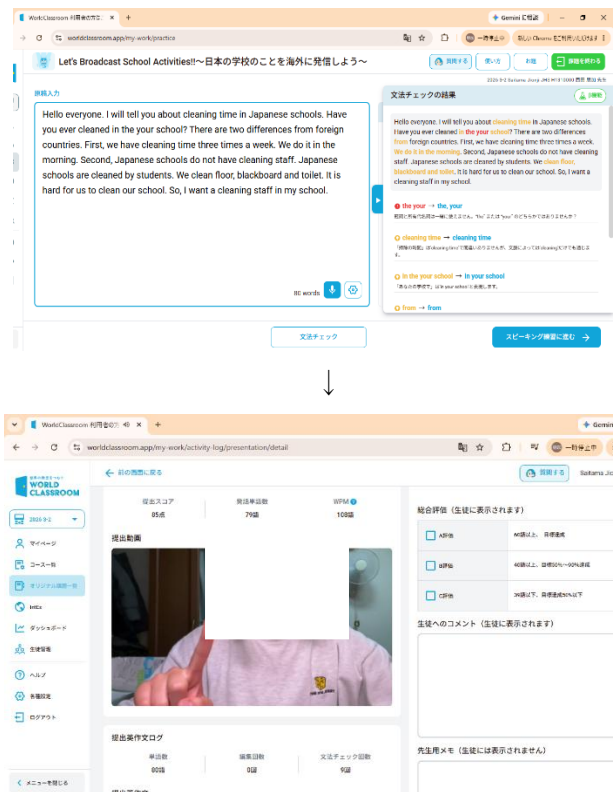
I think you mean the "relay race" is that right? What do you like about the relay race?
Yes, of course. I like computing. Yes, of course.

「学校生活や行事を紹介しよう」というトピックで、難易度に応じた4人の AI フレンズから相手を選択し、対話活動を行った。生徒は、自分が紹介する学校生活や学校行事について英語で伝え、AI フレンズからの質問に答えながら対話を進めた。対話を通して、相手が知りたい情報や伝え方を意識し、自分の紹介内容を見直して、より伝わりやすい表現へと改善する姿が見られた。また、対話を通して、海外の生徒がどのような内容に興味・関心をもつのかを理解し、その後のペア活動では、自分が質問しやすい内容ではなく、海外からの転入生なら何を知りたいかという相手意識をもってやり取りを行うようになった。また、表情が明るくなり、ジェスチャーを交えながら対話する姿も多く見られた。

(2) プレゼン課題を活用した実践練習

生徒たちは、ペアとの対話活動を終えたあと、パフォーマンステストのリハーサルの一環として、実際の発表練習を行った。その際、話す内容を AI が分析し、文法や表現について即時的なフ

ィードバックを行う。その後、動画撮影を通して自身の癖や発音を見直し、何度もトライ&エラーを繰り返していた。こうした学習を通して、生徒が自信をもって英語で発信することにつながった。以下の写真はその様子である。



3. 研究の成果

ペアやグループで対話を行う際、短い時間であっても対話が途切れたり、発話に自信をもてず黙ってしまったりする生徒が見られることが、本校の課題であった。しかし、本実践では、AI との対話から生徒同士の対話へとつなぐ 2 段階の言語活動を行ったことにより、多くの生徒が対話を継続しようとする姿が見られた。さらに、プレゼン機能を活用した発表練習では、休み時間や家庭でも自主的に練習を重ねる生徒が多く見られた。AI によるフィードバックを受けながら内容を改善し、その成果を授業でのペア活動に生かす姿も見られた。

事後アンケートでは、「間違えても恥ずかしくない」「緊張せずに話すことができた」「つたない英語でも聞き取ってくれたので、頑張って話して伝えたいという気持ちが高まった。」など、AI との対話に対する心理的な安心感について多くの回答が見られた。また、「自分のレベルに合わせて取り組めた」「発音や文法についてアドバイスがもらえた」「会話を見直すことができる」といった意見から、AI を活用した個別最適な学びの有効性

もうかがえた。

一方で、「友達とは表情やジェスチャーを交えて話すことができた」「リアクションや感想を伝え合えた」「教え合いながら学ぶことができた」といった意見も多く見られた。このことから、生徒は AI と人とのコミュニケーションにはそれぞれ異なるよさがあることを実感し、AI との対話が実際のコミュニケーション活動への自信や意欲につながったことが示唆された。

4. 研究の課題

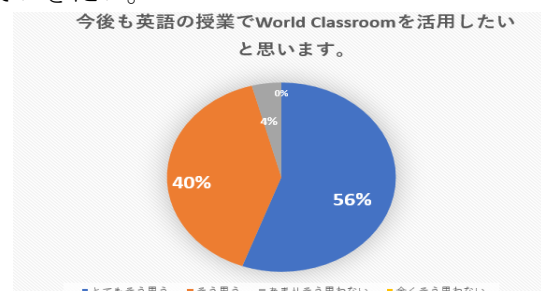
事後アンケートの改善点に関する自由記述では、「話した内容を正しく聞き取ってもらえないことがある」「発音が正しく認識されず、別の単語として処理されることがある」など、AI の音声認識精度に関する意見が複数見られた。特に、固有名詞や駅名などについては認識に課題が見られ、そのために対話が途切れてしまう場面もあった。AI を活用した学習をさらに充実させるためには、こうした機能面のさらなる向上が望まれるとともに、生徒からも改善を期待する声が寄せられた。

5. 今後の展望

事後アンケートでは、96%の生徒が今後も「World Classroom」を活用した英会話学習を継続したいと回答した。安心して英語で話すことができることや、自分のペースで学習を進められること、実践的な英会話を経験できることなどが、その理由として多く挙げられた。

今回紹介した「World Classroom」は、生徒がいつ、何度、どのように活用したのかが動画・音声・文字として記録されるため、生徒自身が学習を振り返りやすいだけでなく、教員も学習過程を把握し、一人一人の実態に応じたきめ細やかなフィードバックや授業改善に生かすことができる。こうした学習ログを指導に生かすことは、生徒の学びを可視化し、個別最適な学びと教師の指導改善を両立する教育 DX の推進にもつながると考える。

今後も AI と対面での対話活動を効果的に組み合わせながら、生徒一人一人が安心して英語で表現し、自信をもって発信できる授業づくりを目指していきたい。



第4分科会

- ・ ICT と AI を使った授業改善

上尾市立大谷中学校 廣瀬 駿

- ・ 言語活動を主軸とした表現活動の実践

羽生市立西中学校 金子 直樹

AI 英文添削を用いた個別学習及び中間指導の充実を目指して

上尾市立大谷中学校 廣瀬 駿

本実践は英語の授業におけるライティング指導の際に AI 英文添削を用いて、生徒に即時的なフィードバックを与え、なおかつそのフィードバックを中間指導として全体共有するという授業デザインの実践事例である。「UGUIS AI 英文添削」を用いて個別最適なフィードバックを、「スクールタクト」を用いて誤りの多い箇所や良く書けているモデルの提示を中間指導で行った。教師の添削時間の軽減および学力中位層の生徒のライティング力の増強が見受けられた。

1. テーマ設定の理由

2021 年度より GIGA スクール端末の活用が始まり、早くも 5 年が経過した。現在我々の目の前にいる生徒はいわゆるデジタルネイティブ世代であり、生まれたときから、デジタル機器に囲まれ、その知識や機器の操作にいたっては我々教師以上に巧みである。また昨年 ChatGPT や Google Gemini といった生成 AI の発展も目覚ましく、もはや我々の生活の一部になっているといっても過言ではない。多くの先生方が生徒に何か書かせる活動（英語に限らず）の際に、こうした生成 AI を生徒が使用している現状もあるため、その指導に困難さを感じている先生も多いことであろう。かつてワープロが世に出回ったころ、「大学のレポートや論文は手書きでないと受理しない」という過渡期があったと聞く。しかし現在、もはや手書きでレポートを書いたり、論文を書くことはほとんどない。いわゆる整った文章を書くため（今回の実践報告も含む）と、あればワープロを使用することに議論の余地はない。こうした背景を鑑みると、今我々の周りを取り巻く生成 AI の使用についても、近い将来「整った文章を書く際には生成 AI を活用することが当たり前」になる時代の到来が予想される。そうであるならば、今、学校教育の現場で我々に求められることは、生成 AI を我々の伴走者、協力者として活用する姿を生徒に見せること、また生徒にそのような活用の方法を身につけさせることである。以上の観点から、本実践のテーマを「AI および IT 端末を活用した個別最適なライティング指導、およびそれを統合した中間指導の充実」として設定した。

2. 実践の手順

使用ツールは次のとおりである。

○スクールタクト：

上尾市が契約するクラウド型授業支援システム。クラス全員の回答をプロジェクトターに一

覧表示できる。

○UGUIS AI：

英検・大学入試対策向け英語学習サービス。英文を入力すると、内容評価・誤りの指摘・改善案を AI が即時提示する。

授業の手順は以下のとおりである。

- ①教師がスクールタクト上でライティングタスクを配信する。
 - ②生徒がスクールタクト上で英作文に取り組む。
 - ③生徒が UGUIS AI に自分の英文を入力し、AI による添削を受ける。
 - ④生徒が添削結果をスクールタクトに貼り付ける。
 - ⑤生徒が添削内容をもとに、自分の誤りや気づきをスクールタクトに入力する。
 - ⑥教師は生徒の誤りの傾向や優れた英作文の例をスクールタクトで全体共有する。
 - ⑦生徒が最終稿をスクールタクトから教師に提出する。
- ①から⑤を生徒の個別学習、⑥を一斉学習および中間指導、⑦を個別学習と位置付けた。

3. 実践の効果

本授業実践を通じて感じた効果は大きく二つある。「①教師の添削時間の圧倒的な負担軽減」および「②中間層以上のライティング力の向上」である。①については、従来のように、教師が添削するとなると授業時間ではほぼその添削を終えることは難しい。しかしながら生成 AI を活用すると、ほんの数秒で生徒の書いた英作文の添削を終えることができ、これまで英作文の添削にかかっていた時間を丸ごと短縮することができる。そしてその授業時間内に、生徒の多くに見受けられる文法上の誤りや語法のミス、そしてよいライティングモデルを中間指導として全体共有することができるのである。

また、英作文添削というと、文法項目はもちろんのこと、課題に対する答え方や内容のまともにも添削するが、生成 AI ですでに文法や語法について添削されたものが最終的な生徒の成果物として提出されるため、教師はその内容項目についてのみ時間をかけることが可能になる。②については基本的な文法項目を即時的に生成 AI が添削をしてくれることで、個々の生徒の文法や語法ミスがその場ですぐにわかり、エラー強化すなわち、誤りの早期修正・定着防止につながる。そして教師による中間指導により、より優れたモデルから学び取り、同じ教室の優れた学習者から学びを深めることが可能となる。(下図①が最初のライティングおよび AI 添削後の生徒のライティングである。

①

原稿を打ち込みなさい
Students must wear school uniforms.
Students must not bring smartphon.
Students don't have to join club activities.
Students have to come to school by 8:20.
Students have to be quwieate.

打ち込んだ原稿を UGUIS AI で添削し、下に貼り付けなさい

Students must wear school uniforms.

Students must not bring ~~smartphon~~ **smartphones**.

Students don't have to join club activities.

Students have to come to school by 8:20.

Students have to be ~~quwieate~~ **quiet**.

気づいたことや、どんなミスをしたかまとめよう

単語ミス(スペルミス)が多かったので単語をしっかり覚えてテストなどの英作文に活かしたいです。また、by と at などの細かい違いを知れてよかったです。

下図②は中間指導を通じてよりよいライティングモデルや生徒の誤りの多いものを共有した後に最終版として提出したものである。) 5 月当初に行われた業者のテストでは未来表現に関する条件英作文については全体正答率 23%の問題に対して校内正答率 41%、5 文の英作文問題については全体正答率 20%に対して校内正答率 31%と一定の効果を確認することができた。

②

Hello, I'll tell you about school rules.
First, students must wear school uniforms.
Second, students must not bring smartphones.
Third, students don't have to join club activities.
Fourth, students have to come to school by 8:20.
Fifth, students have to be quiet while we are studying and cleaning.
Thank you for listening.

4. 今後の課題について

今後の課題については以下のとおりである。

①slow learner にとっては英作文を作成すること自体に困難さを抱える状況もあること。②添削された内容が中学生の熟達度にとっては若干難しい表現があること。①については、ゼロから英作文を書くことができない生徒に対して、書き方のフォーマットや基本文例集を課題設定時に提示することである程度の質を担保できると考える。②については、UGUIS AI は英検向けおよび高校生がメインターゲットの AI 添削サービスのため使用語彙や使用表現に未習表現が表出されることがある。もちろんこうした表現に慣れ親しんでいくことは大切であるが、生徒にとって身近な表現で添削ができるようなものを使用していきたいと考える。最近ではグーグルが提供している Notebook LM (参照するデータを指定することができる生成 AI) や Gem (特定の内容についてカスタマイズできる Google Gemini) 等に学習指導要領や教科書の語彙リストを参照させることによって、生徒にとってより身近な内容で添削することが可能になると考える。

昨今、教師の「働き方改革」が強く打ち出されているが、今回の授業実践を通じて、業務の改善において、生成 AI の活用は大きな利点があると感じた。これまで数時間かかっていたものがわずか数秒で添削ができるのであれば、使わない理由はないといってもよいだろう。そしてその時間を有効に活用することで、生徒にとってよりよい授業の改善につなげることも可能になるのである。

冒頭にも記した通り、もはや生成 AI の活用は我々の生活の一部になりつつある。大切なことは教師が生成 AI に振り回されることなく、生成 AI を我々の伴走者、協力者として積極的な活用をしていくことである。

「言語活動を主軸とした表現活動の実践」

羽生市立西中学校 金子 直樹

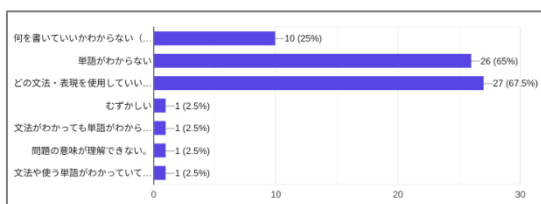
中学校学習指導要領外国語科(平成29年度告示)では、目標として「簡単な情報や考えなどを理解したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力の育成」と定めている。単元の内容を指導する際に一貫した目的・場面・状況を設け、言語活動を細かに実施しながら指導することで、生徒の自己表現の機会が増え、既習事項を効果的に運用する能力を養うことができ、必要とされる思考力・判断力・表現力を育むことに繋がると考える。

1 テーマ設定の理由

本校で使用している教科書(HERE WE GO ENGLISH COURSE3 光村図書)では単元ごとに4技能のいずれかを用いた表現活動が組み込まれている。「既習の知識を他者に合わせてどう使うか」や「自分の意見をどのように他者へと伝達するか」を求められた際に、苦手意識を抱える生徒が多く見かけられた。事前調査においても「どの文法・表現を用いればいいかわからない」と回答する生徒が多数いた。(図1)

そこで言語活動を細かに実践し、生徒が自身の考えを英語で表現する機会を蓄積していけば、効率的に自身の考えを英語で表現できるようになるのではないかと考え、本テーマを設定した。

(図1)英作文が苦手な理由(複数回答可)



2 「言語活動」の定義

本研究における「言語活動」において留意したことは主に以下の2つについてである。

(1)必然性(目的・場面・状況の意識)

(2)相手意識

コミュニケーションにおける見方・考え方を働かせるために明確な目的や場面を設定する必要

がある。また状況によっては受け取り手である相手によって自身の考えや伝える内容を調整することも必要である。

3 研究の実践

本研究で実践したことは以下のとおりである。

(1)単元で一貫した明確な場面設定

ALTとともに実施する Small Talk や TS-interaction を通して、文法の導入から言語活動に至るまでの明確な場面設定を徹底した。またその場面や目標を単元を通して活かせるように、単元構想をまとめた表現活動から逆算して作成するよう留意した。(資料①)

(2)文法事項の反復練習

導入場面で使用されていたその日学ぶ文法をペアワークやグループワークを介して何度も発話し、文法事項の意味や運用方法に生徒自身で、あるいは互いに教え合い気づくことを意識した。

(3)言語活動

(資料②)で示すとおり、最初に設定した場面や目標を達成するために生徒自身が活用できる表現を考えて、目標に迫るよう指導した。また ALT との追加のやりとりを加えることでさらに「相手意識」を持たせ、より ALT の購入希望や生活様式、趣味趣向に寄り添った内容になるよう留意した。

(4) 中間指導の実施

(図 1)の事前調査でも示したとおり、本校生徒の苦手意識は「どの文法・表現を用いればいいかわからない」というところにある。しかし言語活動において「～を用いて」という使用する表現を明確に示すことはよしとされていない。そこで(資料③)のように実際のカatalogで使用されている表現や、グループごとに多かった言い回しを吸い上げ、板書して学級全体に【参考表現】として提示することで、誰もが使いたい表現を板書から選べるようにした。

(5) ふりかえりシートにおける作文の活用

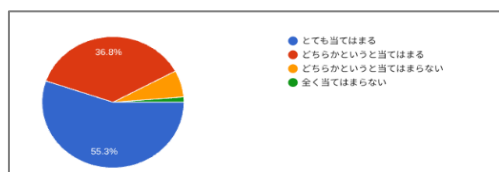
各授業の終わりに生徒がその日の活動(ペアワークや言語活動)において自身が表現した英文を一文、ふりかえりシートに記入するようにしている。(資料④)その作文のうち、★印のついたものを繋げるとまとめの表現活動の骨組みができるような仕組みにしたことで、表現活動が苦手な生徒も取り組みやすくなるようにした。

4 成果と課題

(1) 研究の成果

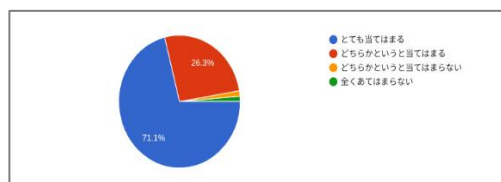
授業後に生徒にアンケートを実施したところ、3-(1)(2)(3)で示した、単元で一貫した場面設定、反復練習、言語活動の流れをとることにより、教師の指示がなくても生徒たちは自発的に単元の途中で学習した文法事項を活用してまとめの表現活動をするよう意識をしたことが伺える。(図 2)

(図 2)単元の文法をまとめの表現活動で活用しようとしたか



また 3-(4)の中間指導においては 97.4%も

の生徒が英作文において【参考表現】のおかげで書きやすくなったと肯定的な回答をしている。(図 3)【参考表現】があると英作文は書きやすくなりましたか



3-(5)のふりかえりシートにおける一文英作文もまとめの表現活動の参考にしたと解答した生徒は 82.9%と多く確認できた。

まとめの表現活動では、その単元で学んだ文法を中心として、生徒達自らが提示した【参考表現】を活用しながらまとまりのある文章を書くことができていた。内容面に関しても、ただ単に生徒が自身の考えを書くのではなく、言語活動で設定した「相手意識」をもちながら、相手の要望に即したものを作成することができていた。(資料⑤)

(2) 今後の課題

単元を一貫した場面設定を設けつつ、言語活動の機会を増やすことで生徒の表現の機会を増やすことができたが、時には言語活動ではなく文法の反復練習と差異のない活動となってしまっていたため、使用する表現の幅を狭めることとなっていた。また【参考表現】を生徒達から吸い上げることで英作文を書きやすくなることはできたが、生徒のふりかえりの中には「自分の力で使用する表現をまだ思い浮かべることができない」という声も多い。今後も実践を重ね、自己表現をより自由に行える生徒を育てていきたい。

【資料読み取り】

